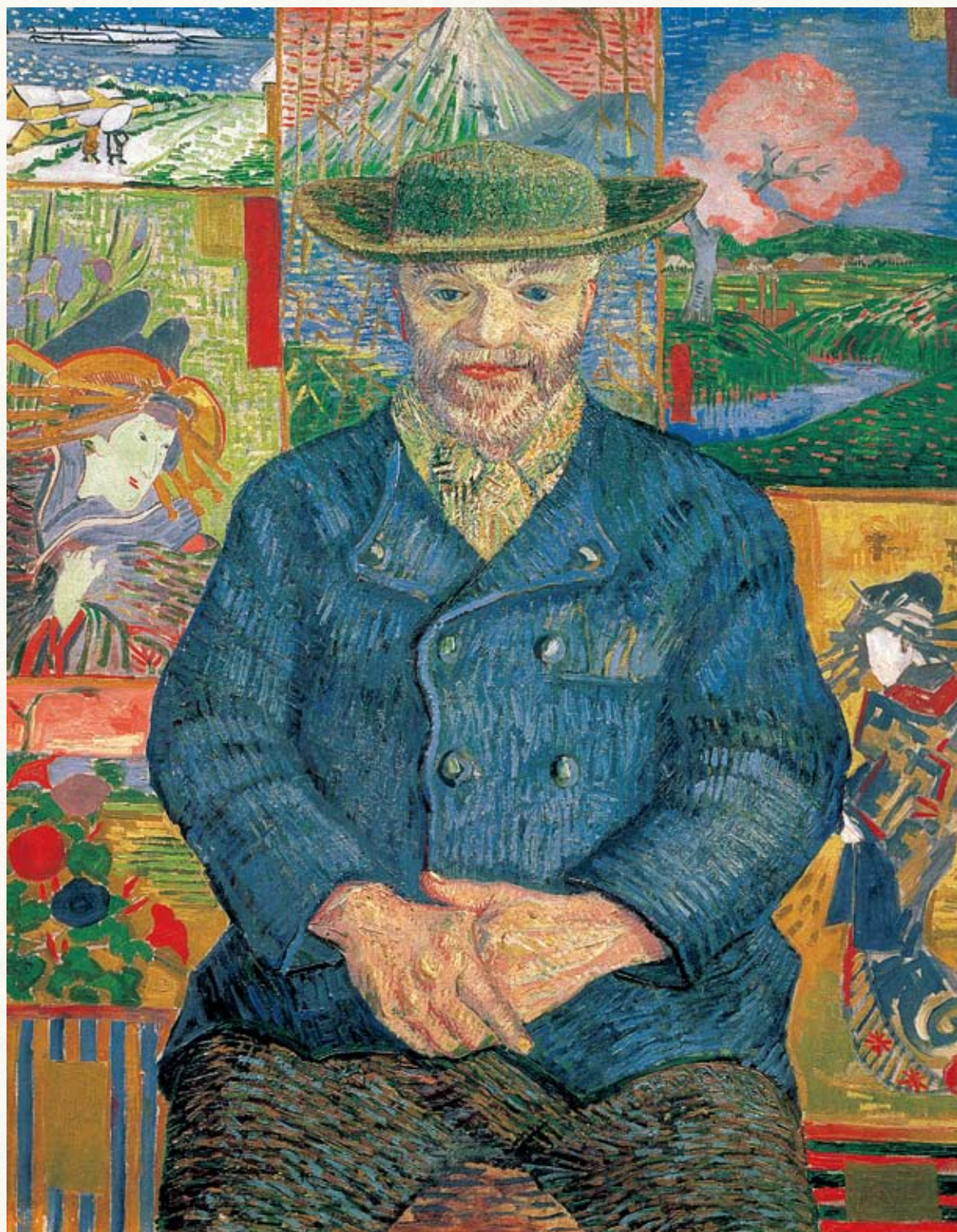




第 4 回

「タンギー爺さんの肖像」

フィンセント・ファン・ゴッホ

キャンヴァス,油彩 92×75cm 1887～88年 ロダン美術館蔵 (フランス)

Photo:The Bridgeman Art Library / DNPartcom

背景も主張する

ゴッホが生まれたのは江戸時代でした。1853年(嘉永6年)日本では黒船襲来として記憶されている年です。

「タンギー爺さんの肖像」が描かれたのは1887年(明治20年)ゴッホ34歳。この3年後にはもう亡くなっているんですね。

やさしい目をした、実直そうなお爺さんの背景に、日本の浮世絵がたくさん貼ってあります。タンギー爺さんは、貧乏な若き芸術家たちに理解のある、画材屋さんであり画商でもありました。

そうして、当時大人気の浮世絵のコレクターでもありましたから、あるいはこのまんまがお爺さんの店先の様子で、この絵は単なるリアリズムであるとも考えられます。しかしもし、この絵の背景が黄色一色だったらどうでしょう。

ゴッホは、どうしてもこの浮世絵をバックに描き込んだ絵を描きたかった。ゴッホにとって浮世絵は憧れ

でした。自分の目ざしている「新しい絵」の発明のキッカケでした。

日本の浮世絵は、どうしてそんなにヨーロッパの画家たちにショックを与えたのでしょうか。それは、自分たちとはまったく違った文化が、まったく違った絵の描き方を生み出していて、しかもそのクオリティが自分たちが作り上げたものと肩を並べる到達をしていたということへの驚きだったでしょう。

どちらが上とか下とかではない。まるで違っているところに、画家たちは刺激されたのです。

同じことは日本でも起きていました。葛飾北斎や歌川国芳、平賀源内や高橋由一は、まったく自分たちとは違う考え方で描かれた西洋の絵に驚きました。

しかし、ゴッホもそうであったように、自分たちのもっているものを、かなぐり捨てて、すっかり宗旨替えをしたのかといえそうではないの

です。

高橋由一は油絵で、焼き豆腐と油揚げを描き、鮭やおいらんを描きました。北斎は西瓜の上に薄紙をのせて菜切り包丁を添えた写実画を描いています。

ゴッホも何枚かの浮世絵の模写を描いたあと、アルルに自分の「日本」を見い出します。

絵の中に絵が描いてある。いわゆる画中画にはたくさんの先例がありますが、この絵のようにみずからの信念や理想の宣言みたいな意味をもたせた画中画は珍しいでしょう。

ゴッホは、いわゆるゴッホらしいスタイルを発明しただけでなく、そもそも絵描きを目ざして描きだしたその当初から、絵というものにとてつもない希望を託していた画家でした。同じように日本の浮世絵に刺激を受けた他の画家たちとゴッホの視線はあるいはまるで違っていたのかもしれない。

イラストレーター。
1947年東京都生まれ。
漫画雑誌『ガロ』編集長を経て、
イラストレーター、エッセイスト、装丁デザイナー。
著書に『モンガイカンの美術館』(朝日新聞社),
『のんき図画』、『ねこはい』(以上、青林工藝舎),
『本人伝説』(文藝春秋),
『オレって老人?』(みやび出版)など。

南 伸坊
みなみ・しんぼう